

世界遺産登録地域における保存活動とツーリズムの共存の 実態に関する調査

—鹿児島県屋久島および岐阜県白川郷の比較社会学的研究—

A Research for the Symbiosis of Conservation Activity and Tourism in the
World Heritage Areas

尾上 正人*

Masato Onoue

はじめに

2005年5月20日、世界自然遺産に登録されている鹿児島県屋久島の現在の観光（ツーリズム）のシンボルとも言える「縄文杉」の樹皮が、何者かによって一部剥ぎ取られるという痛ましい事件が起こった（正確には、発見された）。12カ所ある剥離跡には、剥いだ後に叩いたり突いたりした形跡があり、赤い樹液が出ている傷口もあったといい、それらから細菌が入って腐敗する恐れがあるという（「南日本新聞」等）。

この縄文杉は推定樹齢7,200年とされているが（「縄文」の名の由来）、「弥生杉」や「紀元杉」などの他の有名な高齢の屋久杉と比較すると、人間社会とのかかわりが比較的最近までなかった杉である。というのも、縄文杉が発見されたのは1966年のことだったからである。すなわち、7,000年以上にわたって、この杉と島民（さらには人間社会一般）は全く交わることがなく別個の生活圏の中に生きてきたわけである。にもかかわらず、この杉には人間の側の時代区分（歴史区分）で生誕年代を画した名称が付けられている。これはもちろん、弥生杉や紀元杉にも当てはまることである。

このことは、単に屋久島のような世界自然遺産に限らず、文化遺産・文化財一般と人間の関係を物語る興味深い題材であるように思われる。すなわち、自然や文化遺産に対する時の我々は、常に言わば人間中心的な態度で、また現在中心的な態度で、接しているのである。こうした態度は、ツーリズムに携わる人々（観光客・観光業者）だけでなく、遺産の保護を唱える人々にも共有されている場合が多い。そこで本稿では、私が屋久島と岐阜県白川村（白川郷）において行なった世界遺産保存の実態調査に基づいて、遺産保存という、優れて人間的また現

代的な活動の本質について考察し、さらには調査のテーマであった保存とツーリズムのあるべき関係について短い提言を行なってみたい。

I 自然遺産は「手つかずの自然」か

冒頭で紹介した縄文杉の痛ましい事件は、決してあってはならないことではあるが、このような人間の手による屋久杉に対する破壊行為は、しかしこの事件が初めてではない。つまり、現在世界自然遺産に登録されている屋久杉の森の多くの部分は、「手つかずの自然」ではなく、かなり昔から人間の手が入ってきた歴史を持っている。すなわち、生業としての林業という、観光客の悪戯（おそらく）とは動機は全く異なるものではあるが、1970年代までに多くの屋久杉は人間の手によって伐採されてきたのであり、その爪痕は、至るところに残されている。そればかりか、そうした人間による自然破壊の爪痕は、現在では、屋久島の自然遺産の価値にとって無くてはならないものとして記録されるようになってきている。

その典型が、縄文杉に向かう登山道の途中にある「ウィルソン株」であろう（図1）。言い伝えによるとこの「株」



図1. ウィルソン株

は、1586年に豊臣秀吉が京都の方広寺大仏殿に使うために伐らせたもので、1914年の米植物学者の来島を記念してこの名が付けられた。もちろん、近世の屋久杉伐採はこの例に尽きるものではなく、屋久杉は脂分が多くて腐りにくいことから建材として重宝され、徳川期の薩摩藩支配下には、耕地面積の少ないこの島では米に代わる年貢として杉板が徴収されていた。とは言え大規模な伐採が始まるのは明治期以降で、特に大正期以降、現在は登山道としても利用されているトロッコ軌道が敷設されてからは、多くの屋久杉の命が絶たれて搬出されていったのである。



図2. 白谷雲水峡の切り株

の世代の杉が生える「切り株更新」あるいは「二代杉」の現象も多く見られる——倒木の上に生えたものは「倒木更新」と言う。このような人間による加工が端々に入った森をモデルとして、人間と全面的に隔絶し対立・対決する自然を擬人化して描こうとした宮崎監督には、やや自己欺瞞的な部分があると私は個人的に感じている。

大ヒットした宮崎駿監督のアニメ映画『もののけ姫』の風景画のモデルとなったとされる白谷雲水峡にも、伐採された杉の切り株が多くあり、そうした風景を何気なく我々は屋久島の代表的風景と見なし、したがってまた観光ガイドブックの表紙などにも代表的風景として掲載されることが多い（図2）。屋久島は「月に35日雨が降る」と言われるほど降水量が多く、また切り株自体が栄養分の多い天然の苗床になることから、切り株の上に次

ウィルソン株であれ、切り株更新された二代杉さらには三代杉であれ、それらは屋久島の世界自然遺産にとって無くてはならない一部に現在ではなっている。仮に、それらやトロック軌道などが存在せず、屋久島の森全体が原生林のまま、あるいは文字通りの「手つかずの自然」であり続けたとするならば、これほどの衆目を集める対象になり得たかどうか、私自身は疑問に思っている（自然保護を唱えるいくつかの立場からは、衆目を集めないほうが良かったという主張もなされ得るが、後でも述べるように、そうであったならここまで破壊からの復興・保存が可能であったかどうか）。もちろんそのことは、林業であれ悪戯であれ人間による自然破壊行為を肯定するものではないが、自然遺産と称されるものにも人間の文化の介入（悪く言えば破壊の爪痕）がなされ、そのことを我々は多かれ少なかれ無意識に、遺産の不可欠の構成要素と見なしているであろうということである。

もちろん（世界）遺産にも様々なものがあり、遺産の成り立ちの事情に応じて、そこへの人間の介入の度合いはまちまちであろう。例えば、屋久島と同じ1993年に世界自然遺産に登録された青森県の白神山地は、屋久島に比べると原生林（手つかず）としての価値が強く認められてのものであったと思われる。逆に極端な例として、破壊行為そのものが破壊された対象の元の姿よりも重視されて世界文化遺産に登録された、広島原爆ドームのようなものもある。次の節と関連するが、原爆ドームの保存・修復とは爆風によって破壊された状態の保存・修復にはかならないのであって、原爆投下される以前の状態（広島県産業振興館）に戻そうと主張する者はいない。もしそうなったら、遺産としての価値も完全に失われてしまうであろう。

世界遺産は大まかに、自然遺産と文化遺産に大別されてはいるが、これまで見てきたことから窺われるように、両者の中間的な形態としてのいわゆる「複合遺産」も含めて、両者の区別は相対的なものにすぎないであろう。と言うのも、そもそも人間が自然遺産を見る視点のうちに既に、人間中心的な、その意味で文化含有的な意味合いが付与されているからであり、また、「手つかずの自然」と思われている遺産の中にも、実際には人間の手が加えられることによって、優れて文化的・歴史的な存在となっているものが少なくないからでもある。

Ⅱ 文化遺産は「昔ながらの遺産」か

次に、世界文化遺産の事例として、1995年に同時に遺産登録された、白川郷荻町の合掌造り集落と富山県五箇山（菅沼・相倉集落）のそれとを比較対照させながら、文化遺産の意味について考えてゆきたい。文化遺産とは読んで字のごとく、人間の文化が刻印された遺産であることに異議を唱える者はいないであろうが、その文化の内実ということになると、事はそれほど単純ではない。合掌造り集落が文化遺産・文化財であるとされる場合、それは合掌造りという建築物の集積のみを指すものであるのか（最も狭く定義した場合）。それとも、この建築群を生活の中で利用し（つまり住み）、またそのためにも維持・修繕する住民の文化的営みの総体をも含んでいるものであるのか（最も広く定義した場合）。

岐阜県と富山県の境をまたがって白川郷と五箇山の双方を旅した者は、同じ合掌造り集落で

ありながら、両者の景観の対照性を感じずにはおれないであろう。合掌造り家屋の数が、白川郷の方が圧倒的に多いということもあるのだが、それだけではない。五箇山は昔沼・相倉ともに、集落の中に合掌造り以外の家屋が少なく、全体として調和が取れているがひっそりとした佇まいを見せている（図3）。それに対して白川郷は、荻町集落全体が鳥瞰できる城山展望台に登ってみると、確かに旧街道沿いには合掌造り家屋が多いが、そこを離れてゆくと一般の住宅や小屋がずいぶんと建てられていることに気づく（図4）。このように白川郷において合掌造りでない家屋が増えていった背景としては、特に世界遺産登録以降の言わば観光景気によって、若者（特に次男・三男）がUターンしてくるなど人口が微増・若返りの傾向にあり、また住民が全体として富裕化することにより、新たな住宅需要が生まれていったことが大きい。



図3. 五箇山・相倉集落



図4. 城山展望台から見た白川郷荻町集落

集落全体として、どちらが合掌造りとしての集落の「昔」の景観をよりよく保存しているかという点になると、多

くの観光客は五箇山の方に軍配を上げるかもしれない。逆に白川郷は観光景気によって景観の破壊が進みつつある、と嘆く論者もいる。しかし、この対照性が別な意味で最も強く現れるのは、各合掌造り家屋において2~30年に一度行なわれる萱屋根の共同葺き替え作業においてである。五箇山では人口の高齢化・自然減・社会減が深刻化しており、そのため「昔ながら」の葺き替え作業を住民が自前では行ない得なくなっており、代わって地元の森林組合が全ての合掌造り家屋の葺き替え作業を行なっている。それに対して白川郷では、上記のような人口微増・若返りのエネルギーから、「昔ながら」の村民総出での共同葺き替え作業を今でも毎年4月に行なうことができている——地元ではこの無償労働提供による相互扶助活動のことを「結むす」と呼んでいる（図5）。



図5. 結による屋根の葺き替え作業

やや皮肉な見方をすれば、五箇山は景観を「昔ながら」に維持することによって、「昔ながら」の住民生活・組織活動を失っている。逆に白川郷は、「昔ながら」の住民生活・組織活動を維持できていることによって——共同労働の形態や機械化など、全く「昔」と同じではないが——、景観がやや「昔ながら」でなくなってきたのである。どちらが文化遺産の保存としてあるべき姿なのかは、保存されるべき文化をどう定義するかによるであろう。すなわち、伝統的建造物を中心とする景観が維持できておればよいのか、それともそこに住まう生身の人間の生活まで維持されなくてはならないか、である。そしてまた現実問題として、「昔」とは

生活様式も全く違う現代社会において遺産の中に住まうということは、ある程度までの景観の損失を前提にせざるを得ない部分はどうしても出てくるのである。

このような五箇山と白川郷の保存方針・活動の相違は、単に人口動態などに影響されたものであるのみならず、保存でイニシアティブを握っている主体が誰なのかにも因っている。五箇山が1971年に史跡指定を受けて以降、国（文化庁）の主導の下に保存活動が行なわれていったのに対して、同年に五箇山と並んで伝統的建造物保存地区（伝建地区）に指定されながら史跡指定は受けなかった白川郷は、「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」（通称・守る会）を中心に住民主体の保存活動を行なってきた経緯がある。

五箇山の保存にはこのように国の意図が強く反映されて、いわゆる文化遺産・文化財の「凍結保存」に近いような形が目指されていると言ってもよからう。凍結保存ということ言えば、日本の世界文化遺産の中では法隆寺や姫路城がその典型例にあたる。それらはあたかも時の流れがそこだけ止まってしまったかのように、修復を経つても、なるべく建造された当時のままの形で保存されてゆくことが理想とされている。住職などの直接の管理主体を除けば住民の居住を一切前提としないそれらの歴史遺産においては、凍結保存も決して不可能なことではない。しかし、五箇山においては往時より少なくなったとは言え住民が実際に合掌造り集落に居住して、民宿・土産物屋などを営んでおり、彼らの生活様式まで「凍結」して「昔」のままに強制することなどできない。その意味では五箇山においても、白川郷との程度の差はあれ、現代の人間生活に見合った形での家屋内部のリフォームやひいては景観自身の修正も余儀なくされている。

これに対して白川郷では、凍結保存の方針はほぼ放棄され、住民による言わば「住みながらの保存」が日々行なわれている。そこでは「守る会」を中心に、景観保全の観点から、合掌造りだけでなく一般住宅も含めた家屋の改築・増築に対する自主規制がかなり厳しく敷かれており、決して無政府主義的な「住みながらの保存」ではない。しかしながら、人口増加や住民富裕化によって、規制だけによる景観の保存が難しくなっているのも事実で、民宿・土産物屋等で成功している観光業者の不満が高まる一方で、Uターンした新住民に合掌造り集落からやや離れた場所に新住宅地を建設することも構想されている。白川郷流の「住みながらの保存」は、世界遺産に登録されているところでは奈良町などにも当てはまることであるが、国際的に見ると、南イタリアのアルペロベッコ遺跡などがこれに該当しよう。

文化遺産は「昔ながらの遺産」という問いに対する答えは、その遺産の性質による。白川郷（あるいは五箇山）のように住民の居住が前提とされている遺産においては、完全な凍結保存によって「昔ながらの遺産」を維持することは事実上不可能であり、ある程度の景観や建造物の変化を認めた保存にならざるを得ない。それでは、「住みながらの保存」がめざす保存された状態とは、どういうものになるのだろうか。ここにも一筋縄ではいかない問題が胚胎している。

Ⅲ 伝統の発明——そもそも保存すべき状態とは何なのか

凍結保存の場合には、保存すべき状態というのは比較的明確に探索し得るように思われる。それが建造された時の状態が保存目標である（同じように凍結保存でも、先に挙げた原爆ドームでは、原爆による破壊という言わば「第二の建造」の時点が、保存目標となる）。これに対し、前節で定式化したような「住みながらの保存」が行なわれている文化遺産においては、保存されるべき状態が何なのか、実は明確ではない。と言うよりもむしろ、事実上決定不可能である。まず第1に、もともと庶民の住居として考案・建造されたものであることから——為政者などによって造られた建造物とは異なり——、最初に造られた時点とその状態を特定することは困難である。第2に、「住みながらの保存」である限り、住居としての建造物および周囲の景観には、住まう中で絶えず修復・修正が施されて、現在に至っている。そのうちのいつの時点までが保存されるべき「本物」で、いつからそうでなくなったのかを特定することも、事実上不可能であろう。

日本の文化財保護法では、伝建地区に関して「修景」ということが定められている。それは、「伝統的建造物以外の建造物等（土地も含む）について保存地区の歴史的風致を維持するために、周囲の調和に合わせて修正を行うこと」とされている。おそらくはこのような理念に基づいて行なわれていると思われる修景活動として、才津祐美子氏が自身の調査によって明らかにした白川郷の「守る会」の活動がある。そこに定期的に集う誰もが、「本物」が何であるかについて漠たるイメージしか持ち合わせていないが、そこで行なわれる討議の中で共同主観的に擬似的・近似的な「本物」像が形成されてくるのである。特に興味深い例として才津氏が挙げているのが、電柱の地下埋設工事とそれに伴う（つまり夜真っ暗になっては防犯上もよくないので）景観に合った街灯の設置の検討と、路面をアスファルトに代えて土色にした舗装の構想である（岩本通称編『現代民俗誌の地平3 記憶』朝倉書店。2003年所収）。

前者については、この地域が電化されて以降ずっと電柱は存在し続けたわけであるから、それ自体は「本物」の景観であるわけだが、その「本物」が望ましくないとされて、あえて「修景」が施されようとしているわけである。街灯に関しては、蛍光灯にするか「本物」らしい白熱電球にするかで議論がなされたほか、最初つけられた街灯が「神戸の異人館みたいで白川郷にはふさわしくない」ということで別のものに付け替えられたりもした。後者の舗装の件についても、舗装を完全にやめて土に戻したのでは生活が不便になるというので、土に似た色の舗装にしたのである。このような、ある意味行き当たりばったりの「修景」のやり方については異論を唱える論者もいようが、私としてはむしろ肯定的に受け止めたいと思っている。「住みながらの保存」をするほかないこの種の文化遺産においては、実は、住民の「本物」に対する意識自体も、一つの文化として遺産の重要な構成素になっていると考えるからである。

かつて白川郷のどこにも存在したことがない街灯や土色のアスファルトが今、「修景」の一環として新しく創られている事態は、まさしく「伝統の発明（invention of tradition）」と言え

よう。すなわち、あくまでも現代に生きる我々の観点から伝統・遺産と思われたものが新たに想像されるという、現在中心主義的な偏向である。しかしながら、過去なり歴史なり伝統なりといったものは常にそれを解釈する我々の観点を通してしか認識されえないものであるとすれば、そのことは必ずしも否定的な事象ではない。保存すべき状態は、必ずしもかつて「本物」として存在したものでなくてもよく、特にそこで生活する住民の、またそこを訪れる観光客の、意識の中のみ「本物らしさ」として存在するものであってもよいと、私は考えている。

Ⅳ 保存とツーリズムの共存・両立を目指して

ある自然環境なり文化遺産なりが世界遺産に登録されることは——重要文化財・史跡等の指定にも言えることであるが——、当該遺産の保護活動にとってはまさに、諸刃の剣となる可能性がある。すなわち、一方では、「世界遺産」というネーミングの大きい価値によって、保存活動に弾みがつく可能性がある。すなわち、その他の産業振興策が断念されて、ツーリズムを核とした地域振興が少なくとも構想されやすくなる（現実には日本の世界遺産登録地域のいくつかは、登録によって必ずしもツーリズム振興に成功しているとは言えないのであるが）。その結果として、保存活動の少なくともマイナス要因（自然破壊的な産業活動、公害など）を払拭する努力がなされる。

だが他方では、世界遺産登録によって、大量の観光客が流入し、それに伴って交通網（アクセス）が整備されるようになれば、まずはそのこと自体によって遺産や景観が破壊される可能性が高まる。当初、屋久島の縄文杉には観光用のロープウェイがかけられる予定であったが、環境保全の観点から断念したのは賢明な選択であったと思われる（おかげで今も観光客は縄文杉を拝むためには往復8時間の山道の徒歩を強いられており、このアクセスの悪さがツーリズムの停滞を生んでいる面は否定できないのだが…）。それに対して、白川郷・五箇山においては、それぞれの名を冠した東海北陸自動車道のインターチェンジが開通しており、北陸方面からのアクセスが頗る改善してツアー客が大量に訪れるようになったが、便利すぎて昼間の滞在が増えて却って民宿への宿泊客が減るという皮肉な結果を招いている。

さらにそればかりか、地元住民がもともと生業からツーリズムへと業種転換するようになると、農地が放棄されて景観が悪化するという事態も生まれやすい。白川郷の合掌造り集落の景観にとって田園風景は欠くことのできないものであったが、もともと泥炭地で稲作に骨が折れることから農地の放棄・荒廃が深刻化しつつある。この点、屋久島の事例は対照的であり、生業でありかつ森林破壊行為であった林業が世界遺産登録に先立って放棄され、屋久杉の森の保全が全島の意思となったことで、むしろ保存にとっての追い風となったのである。

ツーリズムが環境・景観の悪化を誘発すれば、観光客の失望を誘い、結果的にはツーリズムが拠って立つ基盤そのものが掘り崩されることになろう。しかしながら、世界遺産の保存とツーリズムによる地域振興は決して相矛盾するものではなく、しばしば危ういバランスの上にはあるが、両立・共存が可能であり、またそうすべきであると私は考えている。その点で、

2003年9月15日にヴェトナムで採択された「アジアの歴史的地域の保存に関するホイアン宣言」は有意義な内容を含んでいると思われるので、関連する部分を引用しておきたい――

「文化遺産の保存とツーリズムの発展は、根本的に相反するものではなく、両者は相互促進的たり得る活動だと見るべきである。とりわけアジアでは、ツーリズムは急速に成長する経済活動であり、歴史的地域の保存のための強い動機付けをもたらしてくれる可能性がある。またツーリズムは、様々な文化を背景に持つ人々が、地域の歴史・文化・芸術と出会い、理解し、さらに強く尊敬するための、非常に重要な機会を与えてくれる。しかし、1999年にICOMOS（国際記念物遺跡会議）が採択した「文化的ツーリズム憲章」で述べられているように、そうした経済活動は適切に管理すべきだし、有形・無形の双方で脆く弱い文化遺産地区とその環境が受けるダメージを避けるべきである。ツーリズム部門の代表は、保存当局と手を携えて、遺産のような修復不可能な文化資源を枯渇させることのない持続可能なツーリズムの発展を成し遂げる道の確立に、努めなければならない」

※本稿は、2005年8月7日になら奈良館で行なわれた世界遺産公開講座「保存と観光のはざま」の内容を加筆・修正したものである。